

# 如意谷遺跡 進入路調査概報

1982年7月

如意谷遺跡進入路調査団  
箕面市教育委員会

# 如意谷遺跡 進入路調査概報

1982年7月

如意谷遺跡進入路調査団  
箕面市教育委員会

## 序 文

古文化調査会は、近年、箕面市如意谷地籍内で、遺跡の発掘調査を前後2回行ってきた。一つは昭和52年夏のことである。住宅・都市整備公団関西支社の委託をうけ、如意谷第2団地建設工事用の進入道路予定地の調査である。次で昭和55年夏には、箕面市立小学校建設用地内の調査であり、箕面市土地開発公社の要請によった。調査の成果については、別に公刊されている概報もしくは報告書に譲るが、水田下から、鎌倉～室町時代にかけての建物遺構などが検出され、そこが中世の遺跡であることが判明した。しかも遺構などは調査地の東方水田下に及ぶことも確認されるなど、遺跡が東側にひろがり所在する可能性が推測されることになった。

ところで、今回調査を試みた地区は、はからずも前記の地帯にあたる。しかも調査地の大半は、宝珠院の境内寺地に含まれるところでもあった。したがって調査にあたっては、中世寺院跡の遺構などをも想定しながら、慎重に事を進めた。結果については後述したとおりである。それにしても、開発地に対して、本調査のような事前調査を実施できたことは、文化財保護の観点からして、極めて意義あることであった。

なお調査にあたっては、終始協力いただき、あるいは努力してくれた箕面市教育委員会の関係者ならびに指導委員、調査員、学生諸君に、深甚の謝意を表する次第である。

昭和57年7月

古文化調査会代表  
如意谷遺跡進入路調査団  
団長 鳥越憲三郎

## 例　　言

1. 本書は、住宅・都市整備公団関西支社の如意谷第2団地進入路発掘調査の概報である。
2. 調査は、住宅・都市整備公団関西支社の委託を受けた古文化調査会（代表 烏越憲三郎博士）が、進入路調査団を組織し、昭和57年4月14日から同年7月20日にかけて調査業務を行った。
3. 本書の執筆はⅠ・Ⅱを島田竜雄、Ⅲを福田薰が担当した。
4. 本書の作成にあたっては、遺物の整理と実測を福田薰・橋本郁也・上田桂子が進め、整図・写真撮映は福田薰が行った。
5. 調査にあたっては、佐藤義明・松島仁・槇田茂・園田克也・足立友成・香林浩道・鎌口端典・新田哲也諸君の協力を得た。

## 本 文 目 次

I 調査地の歴史環境	-----	1
II 調査の経過	-----	4
III 調査の概要とまとめ	-----	7
	第1トレンチ	第2トレンチ
	第3トレンチ	第4トレンチ
	第5トレンチ	第6トレンチ
	遺 物	ま と め

## 図 版 目 次

第 1 図	調査位置図	(本文挿図)
第 2 図	トレンチ位置図	(本文挿図)
第 3 図	トレンチ土層図	
第 4 図	出土遺物	
第 5 図	出土遺物	
第 6 図	調査状況写真	
第 7 図	出土遺物写真	

## I 調査地の歴史環境

調査地の、住宅・都市整備公団関西支社如意谷第2団地の建設工事用道路敷地は、箕面市如意谷378番の2に所在している。もと真言宗宝珠院の境内寺地の一部であった。

この宝珠院は、往昔この地方で栄え、伽藍坊舎を数多く構えて、ひろく諸人の尊崇を集めた「摩尼山如意輪寺」の塔頭寺院であった（同院『縁起』）。今に地元住民の篤い信仰に支えられている「如意輪觀世音菩薩」は、寺記にいう大寺の本尊である。室町時代初期の造像であるが、まこと優美な作風で、往時が偲ばれる優品である。

こうした尊像を祀る如意輪寺には、次のような開創説話が伝えられている。すなわち、平安時代のはじめの弘仁3年、済世利民をめざして諸国遊行の弘法大師が、一老翁（役の行者）の教えに導びかれて当地に来り、教えにしたがつて三ツ石山に至った。そこで如意輪觀音菩薩の示現を得、仏法興隆のため山頂に一字を建てたのが同寺のはじまりであったという。次で陽成天皇元慶4年には、三宝（仏・法・僧）興隆の資として莊園が施入されたから、以来寺運も進んで坊舎数十に及ぶほどに栄えた。しかし応仁年間に至り、兎徒の戦火で仏閣僧舎は灰燼に帰し、難を免かれた宝珠院に、古刹の法灯が伝えられて今に至った、という。

以上のような所伝で注目されることは、寺院草創にあたって関与した一老翁が、実は役の小角（行者）であったと説かれていることである。修驗道の開祖と仰がれ、畿内を中心にして広く各地に足跡を伝えている役行者が開基したといわれる著名寺院の一つに、箕面寺（滝安寺）がある。箕面寺開創説話の詳細はさておき、奇しくも、如意輪寺の創建にあたって役行者が登場し、その教示が根元をなしていることは極めて興味深かい。さらにいえば、箕面寺の信仰の

中心は弁財天信仰ではあるが、ほかに如意輪觀音をもあわせて祀り信仰を集めているのである。

このように、両寺の草創伝承に役行者が主役を演じ、信仰の中心をなす仏尊が如意輪觀世音であることは、往昔の両寺が、同一の宗教世界で結ばれていたことを想定できるのである。実際のところ、両寺は尾根一筋を中にはさんで隣りあってもいるのである。

さて、かつては同色に彩られていたとみられる両寺の開基については、伝えられる開祖がより古い箕面寺からはじまったであろう。そのことは、箕面寺に安置される尊像が鎌倉期の造作あるに対して、一方は前記もしたように室町初期ころであった事からも推測できることである。これらの事情から推して、如意輪寺草創に与かった人は、寺伝にいう弘法大師はともかくとして、おそらく箕面寺々僧か、その系統を引く人びとであったに違いなかろう。そこから、前記したような寺伝縁起がもたらされたのである。

この寺記で注目されるもう一つの事柄は、宝珠院秘蔵の大聖歡喜天像である。所伝によると尊像は諸所を変転したのち、当院に迎えられたというが、果たしてどうであろうか。それはさておき、真言密教と歡喜天はそもそも一体であり、密教世界の護法神としてあらわれるのが歡喜天である。したがって、このような天尊を秘蔵している宝珠院は、如意輪信仰を核とする密教世界に位置し、その世界を守護し擁護する使命をもって設けられたのである。いとなれば、聖・俗両界の接点、門戸に位置しているのである。こうした典型としてみられるのが、俗に「聖天サン」で知られる箕面の西江寺である。この寺もまた、聖地箕面山ひいては箕面寺という密教世界に通ずる門戸の地「平尾（箕面の旧称）」に設けられている。

以上のような聖域を擁する萱野地方の歴史は、いうまでもなく上古の時代にさかのぼるのである。たとえば、如意谷第1団地の用地内からは、昭和41年1月1日、3世紀末の大形銅鐸1口が出土している。弥生時代のむかし、これを宝器として尊重した共同体=集落が、この地域にあったことは確かであろう。

また、調査地の北背1町の至近地には、原始の巨岩崇拜に発する大宮神社がかつて鎮座していた。延長5年（927）の延喜式「神名帳」に載せる「為那都比古神社二座」のうち①座であったと考えている。社記では「比売神」と述べてあり、そのためか江戸時代の古文書では「大婦天王社」とみえている。しかし、地域の詳しい歴史環境については、すでに完結している『箕面市史』、去る3月に刊行された『如意谷遺跡』に譲りたい。

## II 調査の契機

箕面市教育委員会は、昭和52年10月1日施行の「環境保全条例」に基き、市域における開発地での埋蔵文化財等の有無を知るべく、事前調査を行っている。文化財保護行政の一環で、現行では、開発面積1000m<sup>2</sup>を下限としており、一律に実施している。

そこで、今回調査地にあっても、上記の事項に該当し、加えて次記のような従前の経緯からして、事前調査の必要が生じた。すなわち、昭和52年の春夏両度にわたって行った道路敷予定地での発掘調査、その結果を踏まえて実施した、昭和55年夏の箕面市立小学校建設地内での発掘調査によって、調査地が鎌倉期から室町時代に及ぶ中世遺跡地であることが判明した。しかもこの遺跡は、さらに調査地の東側一帯の広範囲に及ぶことも推測されることになった。今回の道路予定地は、まさにこの地域に含まれている。

そこで、公團関西支社と箕面市教育委員会のあいだで、調査の実施について協議が行われた。そのうえで、すでに前記した調査を担当し、この地域に対する状況に精通している古文化調査会（代表 文学博士鳥越憲三郎）に、調査業務を委託した。委託をうけた古文化調査会では、次記の調査会を編成し、調査業務を行うことにした。

### 調査団の構成

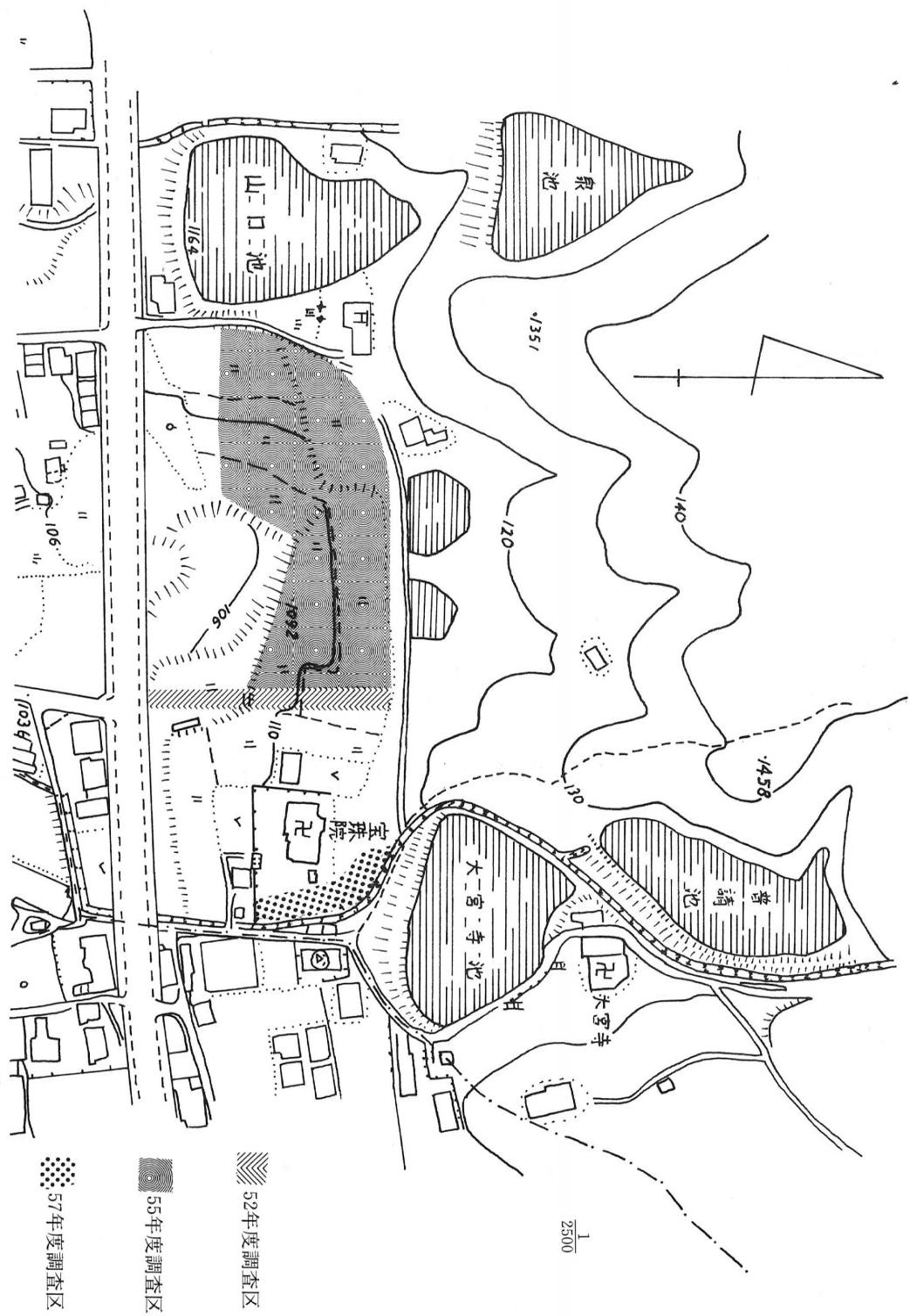
団長 鳥越憲三郎 文学博士・大阪府文化財保護審議会委員  
古文化調査会代表

指導委員 濑川芳則 同志社大学講師・考古学協会員  
島田竜雄 箕面市文化財保護専門委員

調査員 福田 薫 箕面市教育委員会社会教育課職員

事務局 坂上潔司 箕面市教育委員会社会教育課社会教育係長  
角山公朗 " " 職員

調査は、先年の両三度にわたった調査結果を踏まえ、また、調査地が寺域でもあったから、中世寺院跡の遺構などを想定しながら計画し、昭和57年4月中に行つた。



第1図 調査区位置図

### III 調査の概要とまとめ

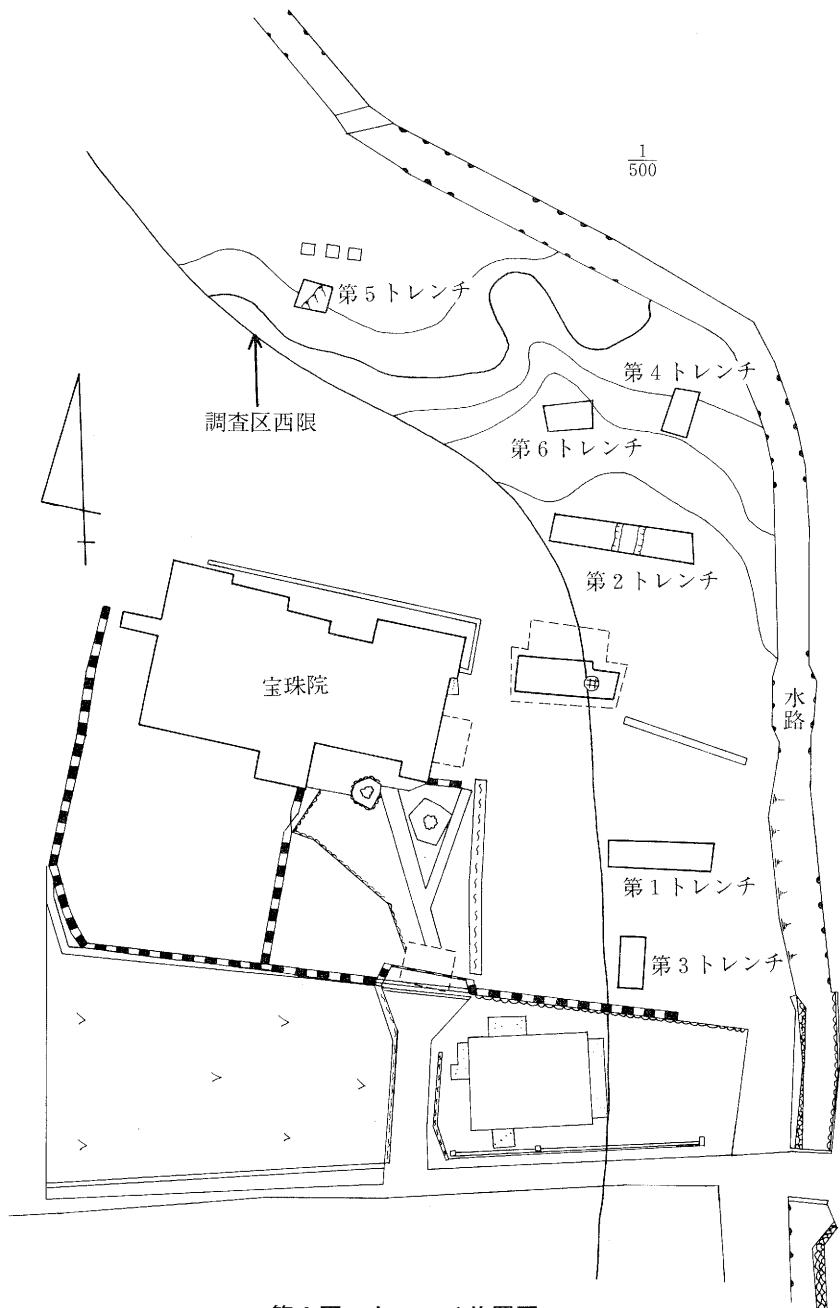
如意谷地区では、昭和52年と同55年の2度にわたり、発掘調査が行われ、  
鎌倉・室町時代の遺跡のあることがわかった。<sup>註1</sup> 今回の調査地は、その東側に位  
置している宝珠院の境内地を対象にして、そこに、遺跡の有無を確認するため  
に行ったものである。調査対象地の南側は平坦地、北側は北摂山地へと続く傾  
斜面である。調査は、対象地をほぼ2分するかたちで南側3か所、北側3か所、  
計6か所のトレンチを設定し、手掘りで行った。各トレンチの調査概要は下記  
の如くである。

#### 第1トレンチ (南北2m×東西7m)

堆積土は、基本的には上層から黒色腐植土層、黄茶褐色礫混砂質土層、茶褐  
色粘土質土層、暗茶褐色礫混粘土質土層という4層からなっているが、かなり  
の攪乱をうけていることが判明した。表土から地山までは約1.3m厚であった。  
検出した遺物は、第3層の茶褐色粘土質土層から土師質皿・須恵質土器片、第  
4層の暗茶褐色礫混粘土質土層からは須恵質鉢・瓦器碗片などであるが、すべて  
小片のみである。なお遺構は全く検出されなかった。

#### 第2トレンチ (南北2m×東西10m)

堆積土は、上層から黒色腐植土層・茶褐色粘土質土層である。その下部第3層  
では、西側が灰褐色礫混粘土質土層、東側は青灰色砂質土層からなっている。遺  
構は、第2層の下面を切りこんだ状態で巾約1.7m、深さ約0.25mをはかる  
溝状遺構を検出した。溝内は径5cm～20cm程度の中小礫がぎっしり詰め込ま  
れており、暗渠の役割を果たしたかと考えている。遺物としては、溝内から近  
世の染付け磁器片若干と瓦片を入手した。ほかに第2層の茶褐色粘土質土層から  
土師質皿、瓦器碗片、羽釜形土器の鶴部が出土した。



第2図 トレンチ位置図

### 第3トレンチ (南北3.5m×東西2m)

堆積土は、上層から黒色腐植土層、黄茶褐色礫混砂質土層からなり、第3層の南側は茶褐色砂質土層、北側は灰茶褐色粘土質土層および茶褐色粘土質土層となっている。遺物は、第3層北側の灰茶褐色粘土質土層から布目瓦、茶褐色粘土層からは須恵器片、瓦器碗片、土師質皿片などが出土した。

### 第4トレンチ (南北3m×東西2m)

堆積土は、上層から暗茶色腐植土層、茶褐色礫混砂質土層、黄褐色砂質土層、淡黄褐色砂質土層、淡茶褐色粘土質土層、茶褐色粘土質土層の6層からなり、地山まで2.5mをはかる。そのほとんどが盛土であり、北側上部に所在している「大宮寺池」築造にあたっての残土を盛土したものと考えられる。遺物は第3層中から磁器片、第4層から埴瓦、土師質皿、瓦器、黒色土器片が少量出土した。

### 第5トレンチ (南北2m×東西2m)

堆積土は上から茶黒色腐植土層、黄灰茶色砂礫土層となっている。地山面は、北西から南東方向へ向けて急激に傾斜している。遺物・遺構ともに皆無である。

### 第6トレンチ (南北2m×東西3m)

堆積土層は上から暗茶色腐植土層、茶黒色砂質土層と続くが、その下層の第3層は盛土で、北から南へ傾斜して堆積しており、これは第4トレンチで判明した盛土に連なるものであろう。

## 遺 物

出土した遺物は少量の小片のみであったが、実測可能なものの30点を撰んだ。

1～8は磁器である。いずれも近世から現代に近いものと認められる。1は第1トレンチ出土の皿である。体部は内湾気味に立上がったあと稜をもち、やや角度を急にして口縁部へ続く。口縁部は尖って終わる。内外面に黄灰色の釉が薄く施されており、体部の内面には灰黒色の釉が帯状に施されている。焼成は甘く、陶器との区別が不明瞭である。2～5は第2トレンチ出土である。2

は鉢とみられる。体部は斜め上方にほぼ垂直に立上がり、口縁部で外反する。内外面に黄灰色釉が施されている。3は椀であるが、肥厚する底部に細い高台が付いている。体部の外面下半部は施釉がない。内面見込に草花の文様が描かれている。4は小椀かと考えられる。体部は内湾氣味に立上がったあと、口縁部で外反する。5は伊万里焼の染付椀。肥厚する底部から内湾氣味に立上がる体部で、口縁部は尖っておわる。断面三角形の比較的しっかりした高台をもっている。体部外面には淡青緑色の網目文様を染付けている。6は第3トレンチ出土の椀。低く細い高台を有する。外面下半部のみ施釉なし。7は第4トレンチ出土の小椀。体部は内湾氣味に立上がり、口縁部で外反する。底部は欠けているが、高台付であったとみられる。外面に青色の草花文様が染付けられている。8は第6トレンチ出土の椀で、内湾氣味に立上がる体部器壁の厚さは、比較的均一に仕上がっている。細長い三角形状の高台をもち、外面には群青色の染付文様がある。9～21は土師質の皿である。9～11は第1トレンチ出土。9は平らな底部からほぼ直状に斜め上方に立上がる体部である。端部は丸く収められるが、体部外面に指頭圧痕が認められる。10・11は比較的ゆるやかな立上がりの体部で、口縁部はやや尖り気味の仕上がりである。12～14は第2トレンチの出土。12は、やや丸味をもつ体部から、斜め上方にゆるやかな立上がりを示す。体部外面には指頭圧痕が顕著に残っている。13は大皿で、体部はやや内湾氣味に立上がる。器厚は割合薄手仕上げである。14は平たい底部から、外反氣味に立上がり、端部も平たく仕上がる。外面に指頭圧痕を残している。15は第3トレンチの出土。口縁部外面は2段の横撫調整で、端部は丸く収められる。16～20は第4トレンチ出土。16は丸味を帯びる底部から内湾氣味に立上がり、角度を変えて斜め上方へ直にのびる体部をもっている。17は平たい底部から、ゆるやかに斜め上方へ立上がる体部で、端部はやや尖り気味の仕上げである。18は短く外上方に立上がる体部で、内外面ともに指頭圧痕がみられる。19の体部は屈曲しながら斜め上方に立上がる。底部は比較的平たく、端部は肥厚して丸く収めてある。20は内湾して立上がる体

部で、口縁部外面は軽いヨコナデ調整、端部は尖っている。21は第6トレンチの出土で、ゆるやかに立上がる体部は途中で急角度に変わる。外面に指頭圧痕が認められる。22は第1トレンチ出土の須恵質鉢。体部は斜め上方へ直線的に立上がり、口縁部で上下に拡張する。全体に明灰色を呈するが、口縁部外面は灰黒色である。23は第3トレンチ出土の瓦器椀である。不定形な貼り付高台から内湾気味に立上がる体部で、暗文は小片のため不明である。24～26は第2トレンチ出土。24は椀で、肥厚気味の底部には細く低い高台が付いている。全面に茶褐色の釉が施されているが、高台の接地面の釉は削り取られている。25は鉢もしくは壺とみられる。高台は低く削り出され、体部下半の一部に施釉があり、上半部は欠失している。26は鉢。体部はやや内湾気味に立上がり、口縁部で肥厚され上下に拡張させている。口縁部外面に1条の沈線が施されている。体部内面にはカキメがあり、擂鉢を小型化した形を呈する。胎土は精良で、色調は淡茶色。27は第6トレンチ出土の擂鉢。斜め上方へ直線状に立上がる体部に続く口縁部は厚味に直立している。口縁の内外面はヨコナデ調整のため段をもち、内面にはカキメが顕著にみられ、焼成は信楽焼であろう。28は第3トレンチから出土した須恵器で、カメの胴部とみられる。29は第6トレンチからの瓦片で、内面に縄目が残っている。30は第4トレンチの出土で、埠瓦と考えられる。焼成は良好、明灰色を呈し、厚さ約3.3cmほどである。

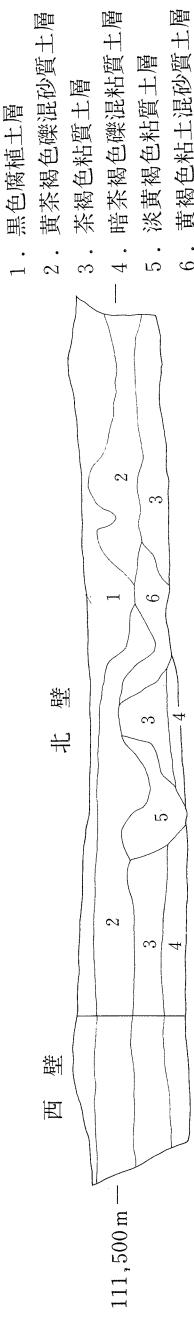
## ま　　と　　め

今回調査の契機と、調査概要は既述の如くである。そこで判明したことは、調査範囲内においては遺構ならびに良好な遺物包含層が検出されなかったことである。それはまた、去る昭和52年と55年の両度にわたった調査で確認した遺跡が、<sup>註2</sup>今回の調査地に及んではいないということを意味する。しかし、出土遺物の中には小量であるが興味深いものが得られた。第4トレンチ出土の黒色土器・瓦器・埠瓦がそれである。平安時代のものと考えられる黒色土器は細

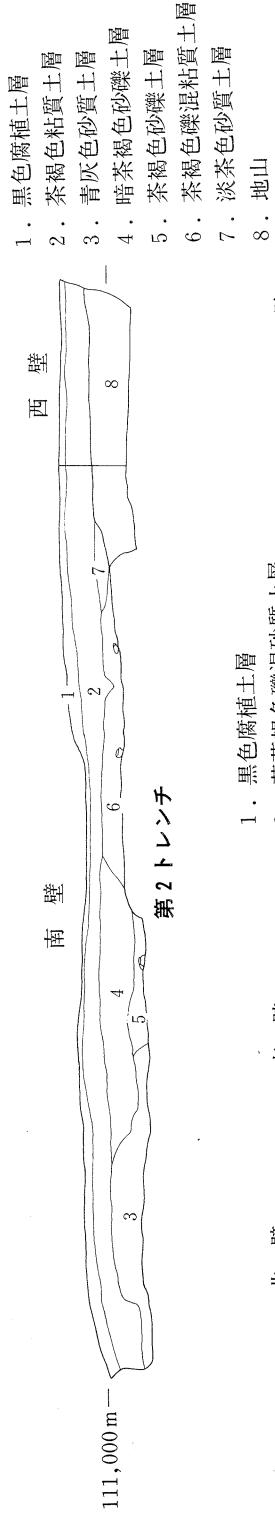
片ではあるが、如意谷地区では初出のもので、前2回の調査時にもなかった。箕面市域でも、今のところ瀬川4丁目第1地点から小量が出土しているのみで<sup>註1</sup>ある。第4トレンチ周辺の地形は傾斜面であり、自然地形であると判断した。だが調査によって、この傾斜地形というものは、人為的な盛土によって出来た地形であることがわかった。この盛土中から、前記した平安時代の遺物が得られたのである。何時、誰が、どこから盛土を移動させたのであろうか。考えられるのは、調査地の北側に接している大宮寺池の築造である。池の東北には、寛平4年（892）の開基と伝える大宮寺薬師堂が所在している。そこには、10世紀を降らない薬師如来像が安置されてもおり、往時は、大宮寺池をも含む地域が寺域であったとみてよかろう。しかし後年に及んで大宮寺池が設けられるに際して、掘削された残土をもって南側に堆積したのが、第4トレンチの地域であったと考えられる。こうして地形の変化が行われたのであろう。してみると、盛土中から得られた遺物というものは、大宮寺との関連を考える上で重要な資料ということができよう。一方、他のトレンチ出土の遺物の大半は、江戸時代から後世のものである。そこから、現在みられる宝珠院の建立時期は、そのころに比定できるのではなかろうか。それにしても今回の調査地では遺構が検出されなかった。しかし、如意谷遺跡の東限の問題、盛土中から入手した遺物の問題探求など、新たな知見と課題が得られた意義ある調査ではあった。

註1 「如意谷遺跡」1982・3如意谷遺跡調査団

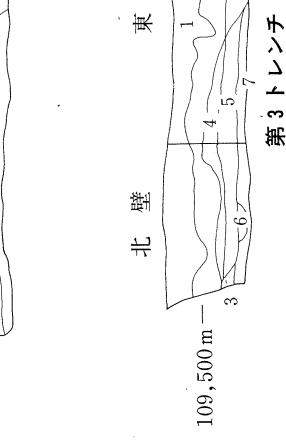
註2 1981年3～4月.箕面市遺跡調査会による調査、目下報告書作成中



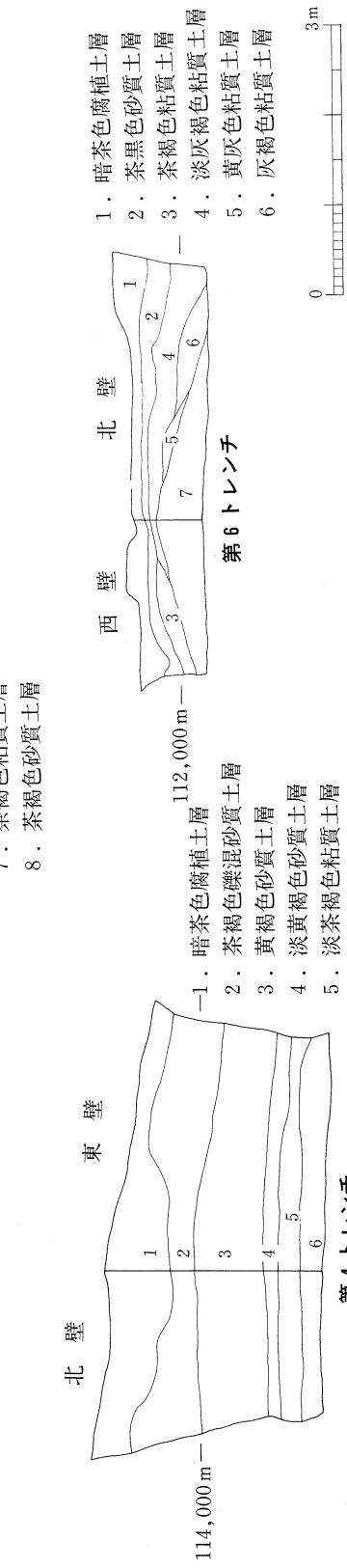
第1トレンチ



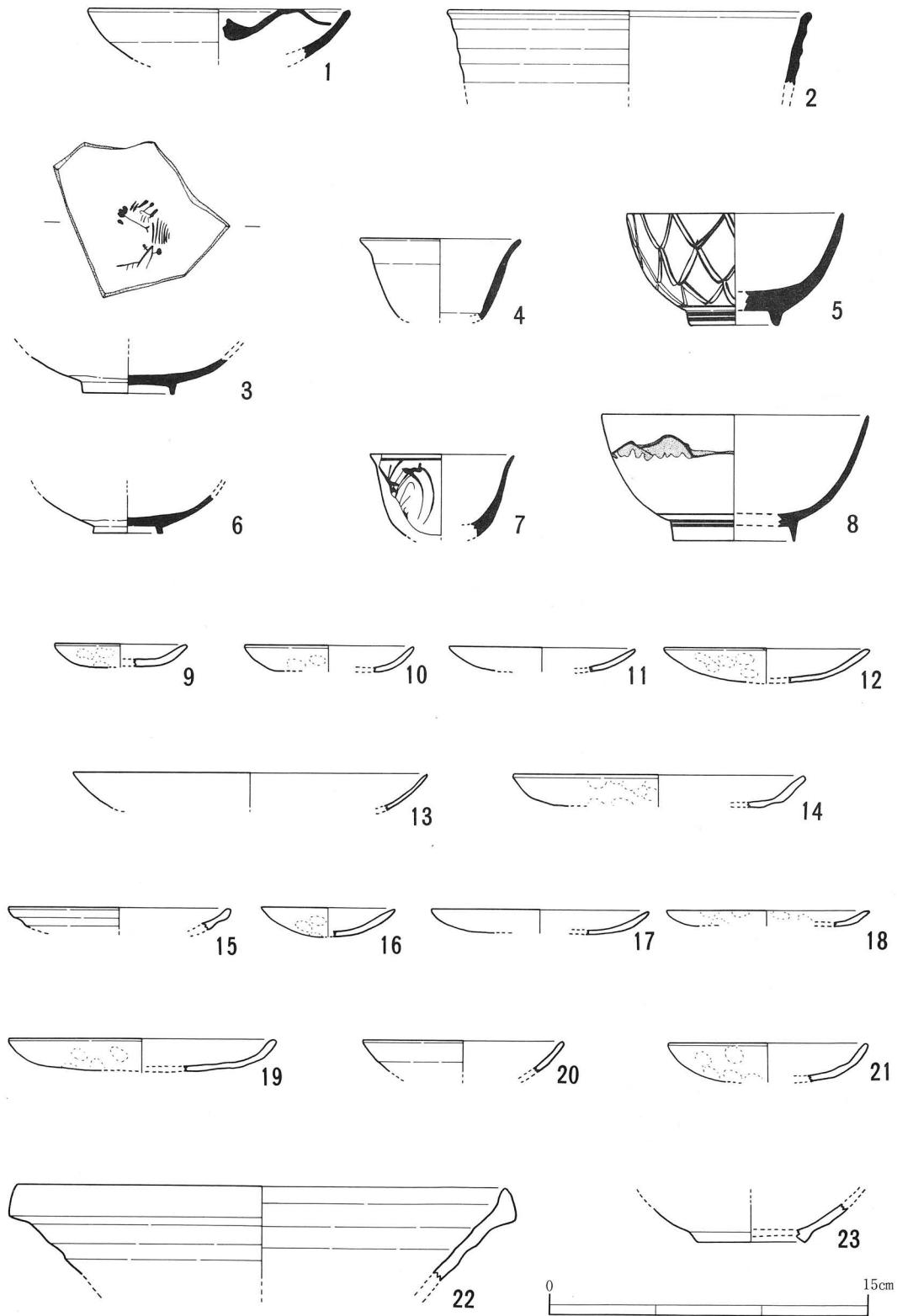
第2トレンチ



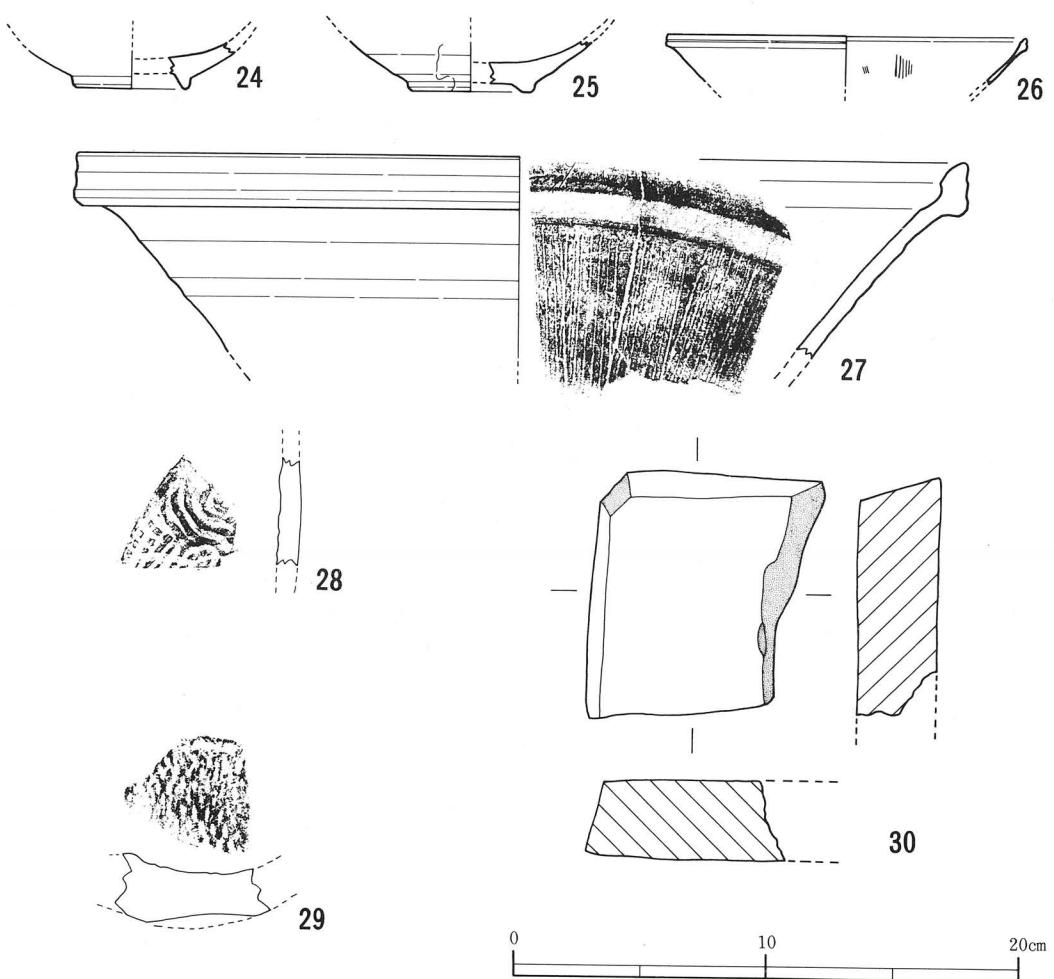
第3トレンチ



第3図 トレンチ土層図



第4図 出土遺物



第5図 出土遺物

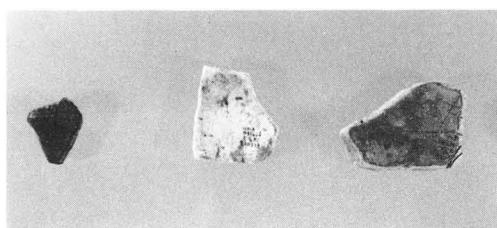
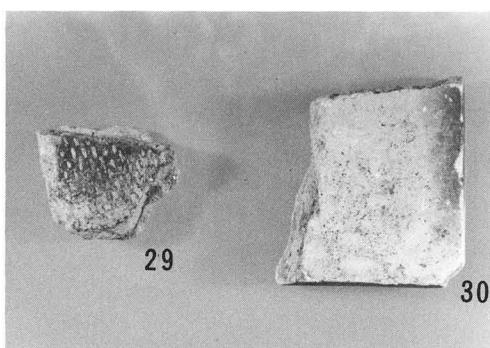
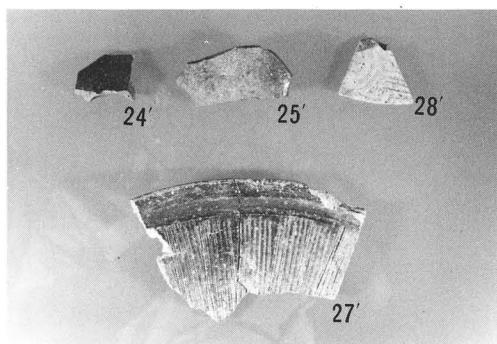
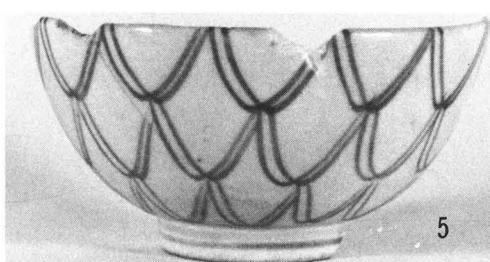
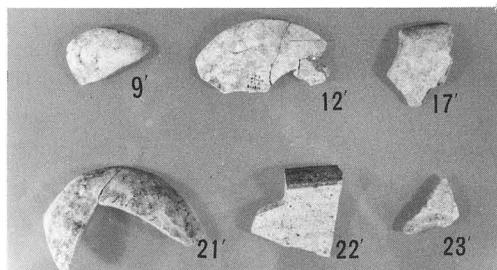
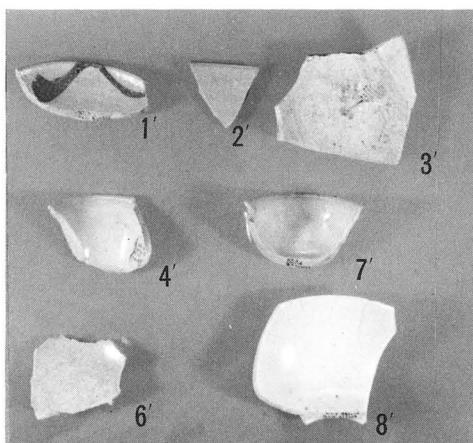
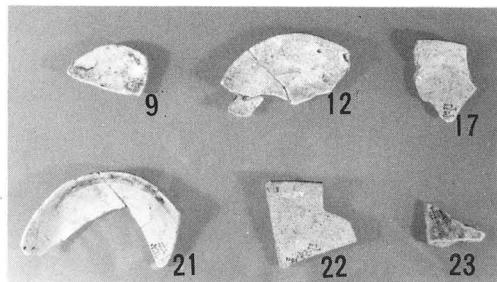
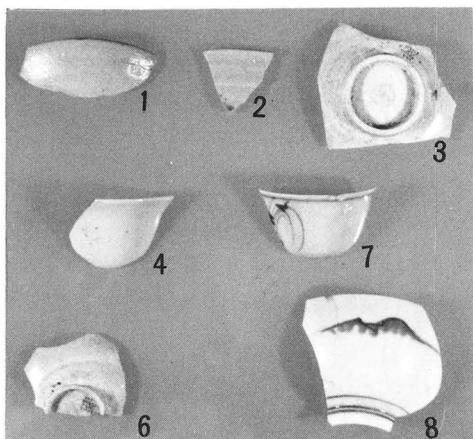


第2トレンチ南壁土層



第5トレンチ西壁土層

第7図 出土遺物



昭和57年7月1日印刷

昭和57年7月15日発行

如意谷遺跡進入路調査概報

編集　如意谷遺跡進入路調査団  
発行

箕面市教育委員会

印刷　大信美術印刷株式会社

